

八王子消化器病院ニュース

第48号

医療法人財団 中山会

八王子消化器病院

消化器病専門医療機関・東京女子医大関連病院

日本医療機能評価機構認定病院

〒192-0903 東京都八王子市万町 177-3

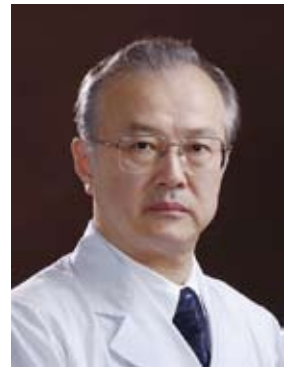
TEL: 042-626-5111

www.八王子消化器病院.com

制作 (株) 教育広報社

おおり

HACHIOJI DIGESTIVE DISEASE HOSPITAL NEWS



「なごりの老練外科医」

八王子消化器病院 顧問 今泉 俊秀

本年4月から顧問として、また外科医として勤務しております今泉俊秀です。中山恒明先生、羽生富士夫先生の篤い志を受け継ぎ、発展し続ける八王子消化器病院の仲間として歩みを共にできる喜びを感じる一方で、その

重責に身の引き締まる思いです。

私は、昭和46年に東京女子医大消化器外科で外科医人生の第一歩を踏み出しました。ここでは特に、羽生先生の猛烈な薫陶の下、外科医としての知識・技術の修得はもとより、その志を受け継ぎ、講師、助教授の職を経て最終的には東海大学外科教授として定年を迎えました。この間、膵胆道外科の頂点を目指してひたすら走り続けました。世界的権威である中山・羽生両先生には遠く及びませんが、多くの貴重な経験を得たこと、そして患者様や同僚仲間にも恵まれたことが最大の宝であると感謝しています。

定年後は、古希を過ぎた老齢外科医に何ができるのか、自問自答しておりましたが、東京女子医大時代の仲間である鈴木理事長、原田病院長からの声かけをきっかけに膵胆道手術3,000例の経験を活かして若い人材を育成したいとの考えに至りました。私の専門は、膵胆道疾患、特に治療困難な膵癌外科です。合理的な手術適応を判断し、適切な手術術式を選択することで安全・確実な手術を行い、退院後は外来通院による化学療法を積極的に行い治療成績の向上に努めてきま

した。これらの経験を通して言えることは、患者様、医療者双方にとって**膵癌治療は決して諦めない!**という信念が肝要であることです。

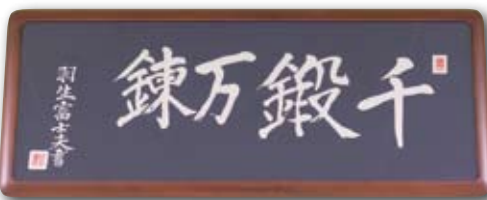
近年、「切れる」外科医の減少は著しく、危機的状況にあります。外科医の育成には、長期間に亘る心・技・体の鍛錬と自己管理が必要であるということは云うまでもありません。そしてその間、時に限界に挑戦し成功し喜び、時に厚い壁に撥ね付けられ敗北に涙する、達成感に感激し喪失感に消耗する。その経験の落差、それこそが外科医冥利であり外科医の醍醐味でもあります。外科医を目指す若人には是非このことを胸に刻んで欲しいと思います。手術を進める中で強く感じる患者様の生命の拍動や温もり、人生そのものを想いながら病巣を制御するという外科手術は、極めて崇高な行為であると改めて痛感する昨今です。

外科手術は「技が既に熟練を通り越して老練の域に達した」ということは、まず、つかみ損ねることがなく、実行に当たっては些かのためらいがない。一見、無造作に見えてもことごとく無駄がなく精確である。「(曙光)フリードリヒ・ニーチェ」と言えます。自らの職種・専門領域を全うするには、この老練こそが必須であります。その道はひたすら自己鍛錬であり、将に「千鍛万錬」の日々です。このステップ・アップを繰り返して行けば、目標とする遙か遠い頂もやがて目前に迫

り、最後に到達することが出来ます。そのためにも、強靱な精神力に支えられた篤い志を持ち続けることが肝心です。

「人生は経験である。」(中山恒明語録)

物事には「はしり」「さかり」「なごり」があります。「はしり」とは、野菜や果物、魚などの出回り期の最初に出るもので「カツオの初物」等がそれに当たります。「さかり」とは、物事の勢いが頂点に達していることであり、人生のうちで心身ともに最も充実した状態や時期のことです。「男盛り」「女盛り」「花盛り」等と云います。「なごり」とは、ある事柄が過ぎ去った後に、なおその気配や影響が残っていることで「名残の袖・袂」「名残を惜しむ」等という言葉に耳にされると、初心・未熟な「はしり」の時期を経て、研鑽・練成し、努力・工夫・発展により「さかり」を迎え、やがて完熟する(燃え尽きる)「なごり」に達する。私は将に、なごりの時期を迎えた外科医と云えるでしょう。これからの人生は、多くの貴重な経験を若人に伝承しながら、自らの目標とする頂を模索して外科道を燃焼し尽くしたいと思っております。



「青春とは、人生のある期間ではなく、心の持ち方を云う。豊かな想像力、燃える情熱を指す。年を重ねただけでは人は老いない。理想を失うとき初めて老いる。」(「青春」サムエル・ウルマン)

もっと知りたい!

身体 治療 のコト

緩和医療

八王子消化器病院 外科医長 梶 理史

〜癌性疼痛について〜

平成 19 年に「がん対策基本法」が施行され、緩和医療について法律で初めて言及されるに至り以降、緩和医療は急速に普及してきました。

緩和医療は、「がん患者となった人が抱えるあらゆる苦痛（＝全人的苦痛）を緩和すること」と定義されます。治療対象となる苦痛は、①身体的苦痛 ②精神的苦痛 ③社会的苦痛 ④スピリチュアルペインの 4 つが該当します。癌患者様の苦痛は、この 4 つが混在して生じるものとされており、どれか 1 つだけを治療しても解決するものではなく、総合的に治療を行うことが重要とされています。

この 4 つの内、身体的苦痛は症状として訴えが出やすく、緩和医療の中で最も治療対象となりやすいものです。身体的苦痛には、疼痛、倦怠感、食欲不振、吐き気・嘔吐、下痢・便秘、腹部膨満感など多くの症状がありますが、癌で最も問題となるのは癌性疼痛、すなわち癌による痛みです。癌による痛みは通常の痛みと異なり、難治性のものも多いことから専門的な治療が必要となります。

なお、WHO（世界保健機関）は WHO 方式が癌疼痛治療法を提唱しており、現

行の疼痛緩和治療はこれに基づいて行われています（図 1）。また、鎮痛薬使用には 5 原則があり、診療はこれに配慮して行われます（図 2）。

1. 侵害受容性疼痛…皮膚・骨・内臓の痛みなど、いわゆる普通の痛みで「にぶい」「重い」「うずくような」と表現されることが多い。

2. 神経障害性疼痛…神経伝導の経路に異常が起こり、その神経が分布している領域に感じる疼痛で「しびれるような」「ビリビリする」「焼けるような」



図 1

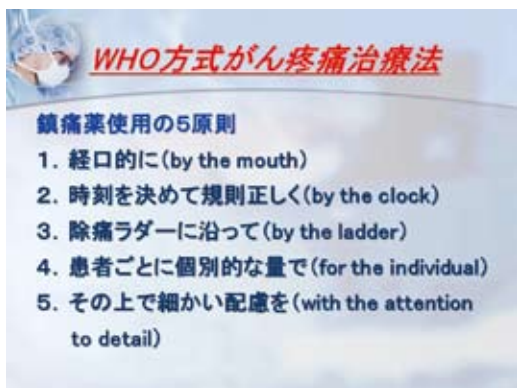


図 2

「電気が走るような」と表現されることが多い。

3. 心因性疼痛…精神的な負荷を痛みとして表現され、ヒステリーの一種としてとらえられる。

治療には、痛みが前述のどれに該当するかを診断し、それに応じた投薬を試みる必要があります。

1. 侵害受容性疼痛に対する薬物治療

非オピオイド（アセトアミノフェン、非ステロイド系抗炎症薬＝一般的な痛み止め）をまず使用します。非オピオイド製剤で除痛が得られない場合は、オピオイド製剤（いわゆる麻薬製剤）を使用します。オピオイド製剤には内服薬・貼付薬・点滴製剤などの種類があります。非オピオイド製剤とオピオイド製剤は薬効が異なるため、両者を併用して使うことで良好な除痛を得ることが出来ます。

2. 神経障害性疼痛に対する薬物治療

侵害受容性疼痛の薬物治療を行っても、効果が乏しく痛みがとれない場合があります。「ビリビリする痛み」「電気が走るような痛み」として訴えられることの多い神経障害性疼痛は、非オピ

オイド製剤やオピオイド製剤で除痛を得ることが難しい場合があります。これに対して、鎮痛補助薬を使うことで除痛を得られることがあります。鎮痛補助薬には非オピオイド製剤やオピオイド製剤の効果を高める意味もあり、抗うつ薬、抗痙攣薬、抗不整脈薬、ステロイドなどがあります。近年、神経障害性疼痛専用の薬剤も開発されています。

3. 心因性疼痛

精神的な苦痛（不安など）は、既存の痛みを増強させることが科学的に証明されています。薬物としては抗精神薬が対象となります。この場合では薬物に頼るだけではなく、精神的苦痛を様々な方法で緩和することが重要です。敬虔なクリスチャンの方が牧師様へ祈りを捧げ、安心できたことで劇的に痛みが改善した例もあります。

このように、痛みは多角的にとらえ、様々な角度から対応することで緩和することが出来るのです。日本では麻薬製剤や抗精神薬などへの抵抗感が強く、日常診療において投薬を拒否される場合も少なくありません。しかし、適切に使用すれば、特に麻薬製剤は癌性疼痛を緩和する意味では最も優れた薬剤といえます。痛みの機序を理解し、適切な治療により除痛を図る、これはすなわち日常生活を有意義に過ごすことに繋がります。八王子消化器病院ではこれらの疼痛緩和を行うことで、患者様が有意義な日常生活を過ごされるよう治療に当たらせて頂いております。

人生初の

入院の日々から

八王子市明神町 在住

長谷川 道子さん



48

その日は投票日だった。昨夕から胃が重苦しかったので投票場近くの医院に寄ろうと家を出た。あまり歩きたくなく近まわりして裏口を入ると、丁度八重桜の花盛り。思わずスマホのシャッターを押した。その程度の体調だったが医院が休みで家に戻り、熱を測ると三十八度。「おかしい」と早速、弟が赤上消化器医院へ連れていってくれたのが翌日。「大変です。紹介状を」と八王子消化器病院へ。胃痛と思っていたのが、急性胆のう炎で即、入院となった。

ことのない私は、点滴と管でがんじがらめといった気分だったが、大人しくしていた。痛かつたし・・・。

これまた数日後、ベッドの移動願いをされたが運良く窓側のベッドだった。毎日、四階の窓に日を浴びた風景が眺められ嬉しかった。寝ていられない質なので、スケッチしたりメモをとったりして過ごした。

りんごジャム

たっぷり美味し 術後食

抜糸して

心チクチク 窓つばめ

歩行二周

お腹おさえの 深呼吸

さらさらと

竹林に風 鶯の舞い

太陽も 風もお休み 朝曇り曇り空
ありて又良し 茶をすする
夕立や 帰り路の君 今いずこ
大岳や 刻々変わる 夕日空

(道子句)

規則正しい入院生活の間、窓に目をやると新緑が美しく竹林や畑のネギ坊主が見られる。キューピー山と呼んでいる大岳山が見られ、つい数年前友と登った思い出がよみがえる。ツバメやスズメ、トビと野鳥が大空をよぎる。夕日は日々異なった美しさ、陽が沈みかける時、ベッドの内側のカーテンに影が出来るので暫し両手で犬や兎の影絵遊びを楽しんでスマホに撮ったり、早朝は東の窓まで行き、日の出を眺めたり、同室の人や前室のおばあさん達に誘われて食堂まで歩行練習がてら「富士山見えるかな」と見に行ったりと、窓からの自然は一人でも楽しめた。

また、雰囲気の良い消化器病院の方々の応対は嬉しく有難かったとつくづく思う。痛み止

めも安眠剤も使い切り、二週間で無事退院となり順調に回復。手術から二ヶ月目の七月、数年前に絵を担当した冊子「挿絵で綴る演目解説」にある「東海道中膝栗毛」などの八王子車人形の上演に招待され、観に行くことが出来た。その時、本の絵を是非担当して欲しいと言って下さった青木純

一さんと会場で久し振りにお会い出来た。これも元氣になれたからこそ。皆さんの対応の早さのおかげである。

今年の異状なほどの梅雨や台風のじめじめや暑さを乗り越え、ゆつくり・しつかりと回復し、お正月にはお雑煮やお汁粉を美味しく食べられるように・・・と思う。人々の心や自然界に包まれ見守られながら・・・目出度し、めでたし・・・と。

回復は個人差があると聞いていたが、仲良しと共に旅する日も、そう遠くないと思っている。

信州 延命橋スケッチ



看護部(外来)のご紹介

看護師長 田中久美子

超高齢社会の到来に伴い、慢性疾患や要介護・要支援患者が増加する一方、国の医療政策では平均在院日数の短縮化、在宅医療・介護や生活支援などが推進されています。そのような状況の中、医療機関には入院時から退院調整・支援に向けた仕組み作りやそれに伴う病棟部門と外来部門との連携および継続看護の充実が求められています。また、ストーマ(人工肛門)外来やがん化学療法などの専門的治療・ケアも通院で受けられるようになり、それらに対するニーズも増え、個々の患者様に応じた質の高い医療サービスを提供することが重要となるなど、外来看護も変わりつつあります。

病棟部門における看護は、療養上の世話として患者様の食事や清潔、排泄といった日常生活上の支援が中心となります。一方、外来部門における看護は、通院で治療・検査を受けられる方、または在宅で治療を続けておられる方に対するケアや処置などに加えて、短い時間内に患者様の病状に応じた適切な対応をすることが中心となります。

外来には、看護師18名、准看護師7名、看護助手2名の合計27名のスタッフがおります。経験豊かなスタッフが多く、その経験を活かして採血室・説明室、点滴室・化学療法室、内視鏡センターおよび放射線科の4部署に分かれて業務を行っています。

以下、各部署での看護師の業務についてご紹介させていただきます。

【採血室・説明室】

主に採血や注射を行っています。一般的に採血・注射では、上肢の静脈血管に針を刺しますが、その際に血管の見た目や感触、太さや弾力性、また血管の走行や蛇行の有無を確認します。時には、血管の位置が分かりにくいこともあり、その場合は、上肢を温めたり臥床したりすることで血管を出やすくするなど対策を取ります。それでも困難な場合には看護師が交代してご迷惑をおかけしないように努めています。また、採血室・説明室では、入院や検査を受けられる患者様に問診や説明、食事などの日常生活上の留意事項に関する指導も行っています。また、服薬方法に関するご説明いたしますのでお薬手帳を必ずお持ちください。

【点滴室・化学療法室】

主に点滴と化学療法を行っています。消化器がんの治療では、通常は手術療法が中心となりますが、近年は、それに加えて外来で化学療法を行うケースが増えています。化学療法は、一般的に術後の再発防止や切除不能症例の延命、症状緩和、QOL (Quality of life: 生活の質) を改善する目的で行われます。当院では、化学療法専門医やがん化学療法看護認定看護師を中心に化学療法チームを立ち上げ、患者様の不安解消に努めると共に、治療法や治療に伴う日常生活上の留意点などをご理解いただき、ご自身によるセルフケアができるように支援をしています。

【内視鏡センター・放射線科】

ここでは、患者様が安全かつ安心に検査を受けることが出来るように介助や声かけを行っています。また、検査の種類によっては身体

に負担がかかるものもあり、その場合は患者様の表情などから苦痛を感じておられるかどうかを察知し、出来るだけ苦痛を和らげるように看護を行います。

現在、私は看護師長として1年目ですが、看護業務の中で一番大切にしていることは人と人との関係であり、そのことをスタッフに伝えています。患者様・ご家族の方々と外来看護師との関係は、時として一生に一度きりとなることもあり。そのため、様々な事情を抱えて来院される患者様の訴えや仕草などを敏感に捉えて「大丈夫ですか」「ベッドで休ましましょうか」「お待たせしてすみません」などの積極的な声かけが大切です。声をかけるというコミュニケーションを通して患者様の苦痛や不安の内容を知ることができ、時には緊張を和らげて心の内を述べていただくこと



にも繋がると思っています。外来患者様にとつても身近なスタッフである私たち看護部(外来)は、今年度の目標として「患者様がここに来て心から良かったと思つていただける接遇の実践」を掲げています。今後この目標達成と質の高い看護を提供できるよう外来看護師一同努めて参ります。

想うこと



読書週間が始まります。

本は読む人によって理解の度合いが異なり、江戸中期の儒学者新井白石は、そのことに関し「読書は行ないの始め、故に博(ひろ)く書に涉ることを要す。君子百行ある者は、読む所の書に愧(は)じず」・・・立派な行いは読んだ書物によって身に

着いた結果であると説いています。

読書離れ、活字離れに歯止めがかからないようですが、秋の夜長、是非、読書に勤しみ楽しむこととしましょう。そして、特に若い人には良書に巡り会う喜びを知って欲しいと願っています。

理事 久野久夫